

書評 Book Review

God of Justice: Ritual Healing and Social Justice in the Central Himalayas,
by William S. Sax. New York: Oxford University Press,
2009. xii+284p. ISBN 978-0-19-533585-9 (pbk.).

安野早己*

本書の対象は、表題が示すように、北インドの中央ヒマラヤのガルワール地方の下位カースト、いわゆるハリジャンの間に見られる「正義を行う神」をめぐる宗教実践である。著者のウィリアム・サクスは、中央ヒマラヤで30年、宗教人類学的調査を行っている。最初のナンダ・デヴィ研究は高位のブラーマン司祭の間で、次のパンダヴ・リラ研究も高位のクシャトリアすなわちラージプートの間で実施したことから、より深くこの地域の文化を知るために、最も低いカーストを調査対象に選んで、この宗教実践に出会ったという。

本書の構成を概観すると、1章では、著者がどのようにこの神に出会ったかを述べ、フィールドワークに対する認識論的、道徳的な批判への応答を試みている。2章では、正義の神たるバイラヴとはどのような神か、どのように顕現するかを述べている。3章では、託宣的コンサルテーションと主なヒーリング儀礼を描写している。4章では、宗教的職能者たる託宣者ならびにグルのライフ・ヒストリーを紹介し、エイジェンシー論と関係づけている。5章では、儀礼的ヒーリングの対象が集団であって個人ではないこと、儀礼的ヒーリングは、終始、家族とその結合に対して実施されることを示している。6章では、家族の成員が死亡した時、関係がいかに再組織化されるか、つまり、死、幽霊と悪魔払いに関する信仰と実践を扱っている。7章では、競争相手や敵を攻撃する儀礼を取り上げるが、呪うという行為自体が非道徳的であるため、呪う相手が家族の一員であるとき、家族の結合を重んじる価値と相反することから生じるアンビバレンスを論じている。8章では、補遺として、近代合理性によって儀礼的ヒーリングはどのように理解され得るかを要約している。

本書を読む際に、評者が疑問に感じたことが2点ある。それは、第一に、フィールドで聞いたことと実際に見たこととのあいだに齟齬がある場合、どう処理するのか。第二に、一定の地域にとどまらず、広い範囲

を旅しながらデータを集める場合、データのもつ文脈をどう捉えるかということである。

「正義の神」というのは、ハリジャンが侮辱されたり、搾取されたとき、不正の犠牲になったときに頼る、バイラヴ、もしくはカチャ・バイラヴと呼ばれるローカルな神のことである。この神は、ヒンドゥーの伝統的なバイラヴ神とは異なる。ハリジャンの居住地の近くに点在する小さな祠に祀られている。その祠の中には神像はなく、神が現れるのは人に憑依することを通してである。専門的に憑依される託宣者をブッチャリという。

ハリジャンがバイラヴ神を信仰する背景として描かれているのが、ハリジャンがカースト構造の最底辺に位置し、今日なお抑圧を受けやすい社会的弱者であるという事実である。さらに、例えば、チャモリ地方の低位カーストの間には、邪悪な高位カーストから理不尽に搾取され、侮辱される低位カーストを救うために介入する救世主としてのバイラヴという伝承がある。こうした伝承は儀礼で唱えられ、参列者に神による憑依を促す。

バイラヴはカンファタ派のヨギの姿をし、カチャはアゴリ・サドゥーの姿をしているという伝承もある。アゴリは火葬場に住み、火葬の炭火で調理するので、カチャは不浄と結び付いている。ハリジャンのなかには、カチャ信仰こそが身分が低い理由なのだから、これをやめるべきだと主張する者もいる。また、カチャはハリジャンのような弱い者にのみ影響力をもち、知識や識字能力をもつ者には影響しないと見るブラーマン祭司もいる。

正義をもたらすバイラヴ神への信仰は、現地の人々が言うように、下位カーストに固有な実践なのだろうか。著者は、始めの p. 30 で、バイラヴを讃える伝承や歌を高位カーストの間で聞いたことはないと言うが、p. 103 では高位カースト出身の女性託宣者の存在

* 山口県立大学国際文化学部

を紹介し、p. 128 にいたると「バイラヴのカルトはダリット（低カースト）のカルトというわけではない」と実感したという。高位カーストの託宣者に相談に訪れた60歳くらいのラージプートや（p. 140）、低いカーストの託宣者に相談に来た30歳くらいのラージプートも紹介されている（p. 146）。実際のところ、この宗教実践はカーストを超えて見られるようである。

バイラヴ信仰の広まり方には、著者によると、土地、dyani、呪いの三通りがあるという。土地というのは、その上にバイラヴの祠がある土地を領有した者は、バイラヴ神を祀る義務が生じるということである。Dyaniとは、婚出した女性を指し、こうした女性は実家で信仰していたバイラヴ神を婚家へ伴って行く。評者が注目したいのは、呪いである。呪われた者はその懲らしめを解いてもらうために当該の神を祀るに至るので、著者はこれが多くの高位カーストがカチヤ・バイラヴ神を信仰する理由だとしている。

だが、低位カーストが高位カーストを呪うというような事例があるのだろうか。著者は、それには言及せず、自身が観察した託宣的コンサルテーションに持ち込まれるのは、家庭内の争いが大半であると、次のように書いている。「家族の中の緊張や不和は、肉体的、精神的な苦しみをもたらす。土地、他の人の成功への妬み、若い妻への侮蔑と搾取、世代間の紛争、学校で良い成績をとるようにという若者への圧力、新婚夫婦の子供を持ちたいという要求、こうした家族内の緊張のかたちは、定常的に託宣コンサルテーションにあらわれる。そのような否定的な感情は、しばしば懲らしめの根源的な原因とみなされる。こうした感情はある家族員をして他の家族員を呪わせることになる。そして病気と不幸はこうした呪いのせいだとされる。病気と不幸は、懲らしめの症状と解される。相談者の多くが家族の不和を憂え、託宣者にその原因を明らかにしてほしいと頼む。嫉妬の感情、怒り、敵意、などは懲らしめの原因であると同時に症状である。協力して一緒に儀礼を行うことによってはじめて、家族は回復し始める。家族の結合は儀礼の原則であるだけでなく、治療の原則でもある」（p. 136）。

意図的な呪いは、チャモリ地方では、ガット（ghat）を置くという。ガットを置く人は、弱く、自分を守るすべがない極端な状況に置かれているといわれる。その人は、神の祠に行き、犠牲の穴を掘って泣く。その憤りと苦しみの涙は、その中へ滴る。そして彼は言う、「おお、カチヤ、おお神さまよ、私が悪いのなら、いまここで私を殺してください。もし私の敵が悪いのなら、彼を懲らしめ、彼が私のもとへ許しを乞いに来る

ようにして下さい」と。そのような呪いは、感情の葛藤の中で、祠へ行くことなく、発され、忘れ去られることもあるが、にもかかわらず効験はあるという（p. 202）。

家族の中での呪いは、ガットではなく、ハンカル（hamkar）と呼ばれる。それは、未解決の妬み、怒り、恨みである。例えば、ある男性が息子を持たずに死に、その土地を兄弟に取られ、兄弟の息子にその土地（の収穫）を「食べられる」場合、苛立ち、嫉妬、恨みが一緒になって、彼は一種の幽霊、すなわちハンカルとなって彼らを凝らしめる。また、生きている人のハンカルもある。例えば、ある警察官は他所に赴任し、2年ぶりに帰宅したら妻が妊娠していることを知り、怒って妻を追い出した。しかし、その後再婚した警察官は不幸に見舞われ、コンサルテーションをすると、元妻は夫の親族によって妊娠させられていたこと、さまざまな不幸は不正義に苦しむ元妻のハンカルが原因であることが判明する。また、14歳の息子が難病に苦しむためコンサルテーションをおこなった女性は、この女性の夫と、義理の姉とが性的関係をもっていたことを知るに至る。実家がカチヤを信仰していた義理の姉は、性的競争心からひそかに呪いを行ったのである。

こうした家族の中の呪いは非常にアンビバレントである。抑圧者が家族の外の者であれば、犠牲者は、結果を思い迷うことなく呪うことができるが、「どんなにひどく扱われても、どれだけひどい不正義に苦しんでも、家族の成員に対して呪いを発してはならない。そのような行為は道徳的に譴責を受ける。しかし、アンビバレンスが生じるのもまさしくここである。なぜなら、家族は、不正義、搾取、嫉妬や怒りが渦巻く場所だからである。土地の分配への怒り、兄弟の子供への妬み、誰かの成功への嫉妬、—そのような感情は家族の中で普通に見られる。それらは、しばしば不正義と認識される」（p. 217）。

著者は本書の最後で、家族の外で行われたガット儀礼を挙げている。それは、低位カーストの家で、高位カーストのラージプートによって行われた。その男性が放牧をしているとき、落石が起こって、草刈をしていた女性のひとりが怪我をした。明らかな事故にもかかわらず、この男性が意図的に石を投げたと告発する者がいた。敵対関係にあるラージプートの男が、これを理由に彼を逮捕させた。そのため、彼は、「私は無罪である。私が彼女を石で殴ったのなら、私を滅ぼしてください」とカチヤに訴えに来た。この事例においても、呪われた相手は、同一カーストに属している。

ガットという行為は、極西ネパールにも見られることが報告されている。それは「神ないし精霊に対してなされる、正義をもたらす、加害者を苦しめる特殊な誓い」を指し、「土地をめぐる村と村との争い、妻を盗まれてその賠償を十分得られない場合、ものの盗難、もしくは女性の実家と婚家とが不仲である場合」(Winkler, 1976, p. 253) に始まるという。

こうした類似も含め、ヒマラヤに一種の正義をめぐる託宣文化が存在するのではないかというのが、評者が本書に注目する理由である。評者自身、西ネパールのカルナリ流域にみられる「12兄弟マスト神9ドゥルガ姉妹神」をめぐる実践を調査してきた。その特徴はダミと呼ばれる霊媒に憑依し、託宣を通して不正義の犠牲者を救うことにある。その基礎にあるのは、「大人は小人を搾取するが、小人が大人にそうすることは不可能である。だから小人は神に向かって悪を正してくれるように叫ぶ」と説明される(安野, 2000, p. 302)。

正義の神をめぐる伝承や歌や逸話は、神は弱者に正

義をもたらすと、繰り返して伝える。実際の争いは、同じ社会的地位の者のあいだで起こり、とくに家族の成員から搾取されたり、虐待されたと感じたとしても、正義のために神にアプローチすることはできないというアンビバレンスが、本書のテーマである著者はいう(p. 218)。ガルワールにおけるバイラヴ信仰は、どこかでカースト制度の軋轢から生じる不正義を正すための装置として機能しているのではないかと期待するのは、評者の誤読としておこう。

【文献】

安野早己(2000):『西ネパールの憑依カルト—ポピュラー・ヒンドゥイズムにおける不幸と紛争』勁草書房。

Winkler, F., Walter (1976): Spirit possession in far western Nepal. Hitchcock, T. John and Rex L. Jones eds.: *Spirit possession in the Nepal Himalayas*. Aris & Phillips Ltd., Warminster, 244-262.

(2012年12月11日受付)